

### <新型コロナウイルス感染症が5類感染症になります>

約3年半、2類感染症として特別な扱いをしていた新型コロナウイルスが、ついに5月8日より5類感染症となります。季節性インフルエンザと同等の扱いです。

今号では、流行当初から発熱外来を設置して数多くの抗原検査を実施してきた者として、この3年半を振り返ってみたいと思います。そして今後のことについて触れたいと思います。

2020年1月新型コロナウイルスが日本に入ってきました。当初この得体の知れないウイルスは非常に脅威でした。ウイルスの毒性が強く、感染者が次々と死亡するニュースを目の当たりにし、誰もが自ずと人との接触を避ける生活を送るようになりました。学校は休校、仕事はリモート、医療機関である我々のところには誰も来なくなりました。こんな時代が来るなんて！？まさに晴天の霹靂でした。

その後ウイルスは次々と変異を遂げ、何度も感染の波を起こしました。2021年夏、デルタ株が第5波として流行しました。発熱当初は元気に歩いて検査に来院した人が、翌日救急車で搬送されICUに入院する、といった風に、重症肺炎を起こす方が続出し非常に恐ろしかった記憶が鮮明に残っています。2022年夏は第7波、そして昨年末から今年の年始にかけては第8波、いずれもオミクロン株で相当な大波でした。重症化（肺炎など）を起こす方は減りましたが、上気道感染、つまり鼻や喉の症状がメインとなり、耳鼻科である当院へは非常に多くの患者様が検査にいらっしや

いました。1日に20名以上の方の検査をし、8割以上陽性であった日も珍しくなかったです。そして今、ようやく波が落ち着き始めました。

3月13日よりマスク着用が個人の判断に委ねられることになりました。4月1日からは学校現場でのマスク着用が原則不要となりました。規制が緩みつつありますが、感染者数は減少傾向です。当院では引き続き発熱患者さんの検査を続行していますが、ほとんどが陰性、週に1人陽性者が出るかどうかというくらいの頻度になりました。



代わってコロナが現れてからずっと姿を潜めていたインフルエンザが今年は顔を出しました。最近ではインフルエンザに罹られるの方が、コロナの方よりも高熱や倦怠感、関節痛がひどい印象です。普段健康な若い方でも、感染後に肺炎になった方が何人かおられます。こうした現状を見ると、コロナがインフルエンザと同等扱いになることに納得が行く気がしません。やっとそう言えるようになったという気がします。

ただ、コロナが5類感染症になっても、特にウイルスそのものが変わるわけではありません。これまで同様、飛沫やエアロゾル（より細かい粒子の飛沫、空気中に浮遊する）から感染し、感染すれば発熱、咽頭痛、倦怠感、咳などの症状が出ます。発症してから10日間はウイルスを持っており、人に感染させる恐れがあります。この原則は特に変わりませんので、常に認識をしておいていいと思います。

2類から5類感染症になることで、国や県の方針が色々変わります。以下、変更点を記載します。

#### <検査>

- ・抗原検査、PCR検査とも、公費→自己負担へ

#### <治療>

- ・コロナ治療薬（ラゲブリオなど特殊な薬：65歳以上の高齢者やリスクの高い方にしか処方できません）は公費、それ以外の薬は自己負担へ

・コロナ陽性者の診療費が公費→自己負担へ

<隔離期間>

- ・法律による外出自粛規制はなし
- ・外出を控えるかどうかは個人の判断
- ・学校保健法では「発症後5日（発症日を0日目とする）」かつ「症状軽快後1日経過するまで」出席停止
- ・発症から10日間は不織布マスク着用することを推奨

<濃厚接触者>

- ・特定しない

<感染者数の把握>

- ・全数把握→定点把握（リアルタイムに感染状況が分からない）

<保健所からの健康観察>

- ・なし
- ・ただし、療養者支援相談窓口（059-224-2750）は引き続き利用できます

<三重県検査キット配布・陽性者登録センター>

- ・5月7日で終了

また、ワクチンについてはWHOが3月末に新たな見解を発表しました。当院では昨年10月からコロナワクチン接種を終了しておりますが、今後接種を予定される方は以下の表を参考になさってください。



	対象	3回目までの接種	追加ブースター (4回目以降)	説明
高優先集団	高齢者・高度な免疫不全の若者	推奨する	推奨する (12ヶ月おき)	最もワクチンを打つべき集団で死亡率低下効果が高い
	超高齢者・重症化リスクのある高齢者	推奨する	推奨する (6ヶ月おき)	
	月齢6ヶ月以上の小児と成人・中等度以上の免疫不全	推奨する(3回目は3-6ヶ月後)	推奨する (6ヶ月おき)	ワクチン効果だけに期待せず基本的感染対策と早期治療を
	妊娠中	推奨する	妊娠中なら推奨する	妊婦と新生児に最大6ヶ月の免疫をあたえる
	医療従事者	推奨する	推奨する (12ヶ月おき)	医療現場での感染対策のために有効
中優先集団	健常成人・高度肥満や免疫不全の小児	推奨する	定期接種としては推奨せず	追加接種による効果は限定的
低優先集団	17歳までの小児・成人	国による(コストや感染状況で判断)	定期接種としては推奨せず	他の小児ワクチンほどの効果はなく、他の集団ほど高い効果はない